

西巖殿寺とその周辺

中岳およびその活動中の火口の近くに位置する古坊中地域は、かつて阿蘇の宗教活動の重要な中心地のひとつでした。室町時代（1336-1573）までに、古坊中には修験道の行者が修行を行う「坊」または「庵」と呼ばれる宗教的な宿舎が八十八ヵ所つくられました。時代とともに、これらの建物は繰り返し破壊され、荒廃して使われなくなりました。

熊本の大名、加藤清正（1562-1611）は、1600年に古坊中の礼拝所を復活させました。その中で最も重要な建物のひとつは、九州最古の仏教寺院のひとつとされる西巖殿寺でした。

毎年4月13日、西巖殿寺では修験者が裸足で火の上を歩く観音祭が開催されます。心が落ち着いていて、世俗的な考えを捨て去っているなら、火でさえ涼しく感じると信じられています。この祭りでは、参加者が火で熱され湯が張られた大きな鉄鍋に座る儀式も行われます。これは、その後の一年の息災を授けるといわれています。

かつて寺院の長く急な石段を登った先にあった本堂は、2001年に放火が疑われる火災で焼失しましたが、1889年に建てられた奥の院はまだ残っています。著名な作家、夏目漱石（1867-1916）は、小説『二百十日』にこの寺を登場させ、寺の存在を不滅のものにしました。